

ウポポイの修学旅行・研修見学 本格化

道内外の児童生徒が、今も息づくアイヌ文化を学ぶ



連載

9、10月と、道内外の児童生徒のウポポイ見学が本格化しています。新型コロナウイルスの感染防止対応の人数制限の下ですが、修学旅行や研修旅行などで9月は、小中高校を合わせ200校、1万7000人ほどが来園。10月はそれ以上の250校、2万4000人が訪れる予定で、若い世代が共生を考える学びの場となっています。



来園した児童生徒は、滞在時間枠の中で、アイヌ民族の貴重な資料が展示される国内で唯一の国立博物館や、古式舞踊などの上演が最新映像とともに披露される体験交流ホール、伝統的家屋のチセなど園内施設を熱心に見学。事前学習の確認や新知識習得により理解を深めています。

コロナ禍でさまざまな体験プログラム（ムックリ製作や刺しゅう体験、彫刻など）は休止状態。残念に思っているのは、来園する教師、児童生徒はもちろんですが、長年準備を重ねてきたスタッフも同様です。スタッフらは「（プログラム変更など制限は）残念なことですが、ここに来たことをきっかけにアイヌ文化に少しでも興味を持っていただき、いい思い出になるよう全力を尽くします」と接客に励んでいます。（写真はアイヌ民族文化財団提供）

鹿肉もサケも大好き！ 「ふるさと給食」でウポポイ開業記念献立



食文化体験を通して古里を考える「ふるさと給食」が、町内全小中学校で行われました。今回はウポポイ開業（7月）記念として、アイヌ民族の歴史や文化への興味関心・理解を深めるアイヌ伝統料理を提供しました。

献立はアイヌ民族の知恵が生きた「イナキビごはん」「チュプオハウ」「鹿肉のジンギスカン」「ハスカップゼリー」など。萩野小学校4年生のクラスでは、担任の先生が「イナキビって知っているかい？」などと料理の紹介をし、みんなで試食しました。高橋磨緒さんは「ジンギスカンもオハウもとてもおいしい。先週ウポポイに行ってから、さらにアイヌ文化に興味を持ちました。いろいろ勉強したい。アイヌ文様の難しい刺しゅうにも挑戦してみたい」と話していました。（8月26日、萩野小）



知っておこう
アイヌ文化

イタオマチプ

イランカラプテ。アイヌ民族はかつて、狩猟や漁労によって得たものを携え、本州はもちろん、樺太や千島列島などへ渡る、交易（アイヌ語でウイマム）の民でもありました。渡ると簡単に言っても、そこには行く手を阻む海が広がっています。その海を渡るのに使ったのがイタオマチプと呼ばれる板綴り舟です。その構造は、カツラなどの丸太を材料とした丸木舟を土台として、船体の側面は波を避けるための羽板を縄で綴じ、高くした構造になっています。また、大型の幅の広いゴザを帆として使い、オールのように舟の両舷から船べりに支点を設けて水をかくことで推進力を得る車権によって航行しました。

さて、チキサニでは例年、10月上旬に開催する海のイオル「地引き網体験」ですが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、中止となりました。本来ならば、地引き網体験とともにイタオマチプの展示を予定していましたが、代替として10月10日（土）・17日（土）に開催予定の海のイオル「サケの食文化体験」で、チキサニを会場にイタオマチプを展示予定です。体験の詳細は本紙の「くらし百科・催し」にある「イオル体験交流事業」をご覧ください。皆さまのご参加をお待ちしております。



展示に向けて社台小学校で修復作業を行ったイタオマチプ

アイヌ総合政策課 アイヌ総合政策グループ 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301